社会科教育部会

科学的社会認識を育てる授業研究

Ⅰ　主題設定の理由

科学的社会認識の過程においては，事実認識・関係認識・主体認識の３つがある。その指導においては，それぞれにどのような資料を使い，どのような手だてをとっていくかが大切である。この認識力を養うことが社会科のねらいの一つである。基礎・基本が習得され，ある単元で学んだことと身につけた認識力が他の単元にも応用できること。このことこそが，科学的社会認識を身につけたということではないだろうか。

Ⅱ　研究の内容

１小学校部会

科学的社会認識を育てる授業研究を支える観点として「楽しい社会科授業の創造」「習得型の社会科授業」「資料をいかした社会科授業」「活用型・探究型の社会科授業」の４点を設定した。研究授業を中心として，実践的な研究を行った。それとともに，各部員が自分の実践や地域の教材について調べたことを持ち寄り報告することで，日々の実践につなげられるようにした。

（１）授業実践研究（塩山北小学校）

「鉄道が通った」～雨宮敬次郎と中央本線の開通～　４年　吉本　賢司教諭

（２）実践報告・情報交換

（３）臨地研修　①山梨県立博物館

雨宮敬次郎が中央線開通に果たした役割について，学芸員の方から教えていただいた。

②甲斐国分寺跡・国分尼寺跡見学

笛吹市教育委員会文化財課の方から遺跡について説明していただき，各自が授業案作成を行い，研究会で発表した。

２中学校部会

科学的社会認識を獲得するために必要な方法を研究することにより，次のような生徒の育成につながるものと考え研究を進めてきた。

①　学習課題に主体的に向き合える生徒

②　追究すべき課題を明確にとらえることのできる生徒

③　自ら，また他者と協力して考えを深め，客観的な判断を下すことのできる生徒

④　出した結論を様々な資料や他者の意見を参考にしながら検証できる生徒

このことこそが，最終的に公民的資質を持った人間形成につながると考えた。そこで，生徒にとって身近な資料を活用することは，「その結果」を導き出す際の大きな手がかりとなるはずであり，それは科学的社会認識を育てるための一つの手段ともなるのだと考えた。

（1）授業実践研究

前島香織先生（大和中）

題材「身近な地域の調査　身近な地域を見直そう」

（2）臨地研修〔2回〕…　大和地区の史跡めぐりなど（大和地区）

県立博物館（峡東地域の文化財，国文祭特別展示）

（3）各自の授業実践報告

（4）情報交換

Ⅲ　成果と課題

1 小学校部会

・臨地研修をして，そこで学んだことを教材化しようという研究の方向性がとてもよい。

・国分寺跡・国分尼寺跡を実際に見て感じたことをもとに，授業に生かせる資料を収集したり，授業案を作成したり，各部員が発表に向けて意欲的に個人研究を進めることができた。その資料を持ち寄り，互いに意見交換や情報交換を行い，教材化に向けて研究を深めることができた。

・研究授業を通して，東山梨地区にとって中央線はとても重要であることを，子ども達に考えさせることができた。

・地域の偉人を扱うことで，子ども達のキャリア教育につながる実践にもなった。

・教師が調べた膨大な資料が基盤になって，そこから教えるべきことに資料を絞っていくことが大切であることを学ぶことができた。

・教師が知識として知らないで資料を提示しないのと，知っているけどあえて提示しないのとでは，違いがある。そこに教師の力量が表れることを，研究授業や地域素材の教材化を通して学ぶことができた。

・せっかく臨地研修をして教材化に取り組んでも，部員数の減少によって授業実践につながらないのが残念である。

2 中学校部会

・臨地研修では，大和地区の文化財を行政の積極的な保護という立場からも学習することができ，その価値を再認識することができた。

・授業研究では共同研究として，学習授業案検討を重ね，会員共通の視点で練り直しを図ることで，科学的社会認識を高める授業づくりを行うことができた。

・現状を学び，自分たちの地域の未来像の一端を話し合わせることにより，社会科という教科としての魅力について再認識することができ，多くの価値観を共有することができた。

・授業実践，授業案検討を通して先生方の実践を学ぶことができた。

・膨大な学習事項を扱いながらも，科学的社会認識を育てる授業づくりを目ざし，今後も言語活動，ペア学習等，授業の中で具体的にどう仕組んでいくか，研究を継続させたい。また，生徒の思考を深めさせるために，資料を基に「そこから何を考えるか」など教師の「発問」についても研究を深めていきたい。

（小学校部長　橋本　尚一　　山梨小）

（中学校部長　酒井　理恵子　　勝沼中）